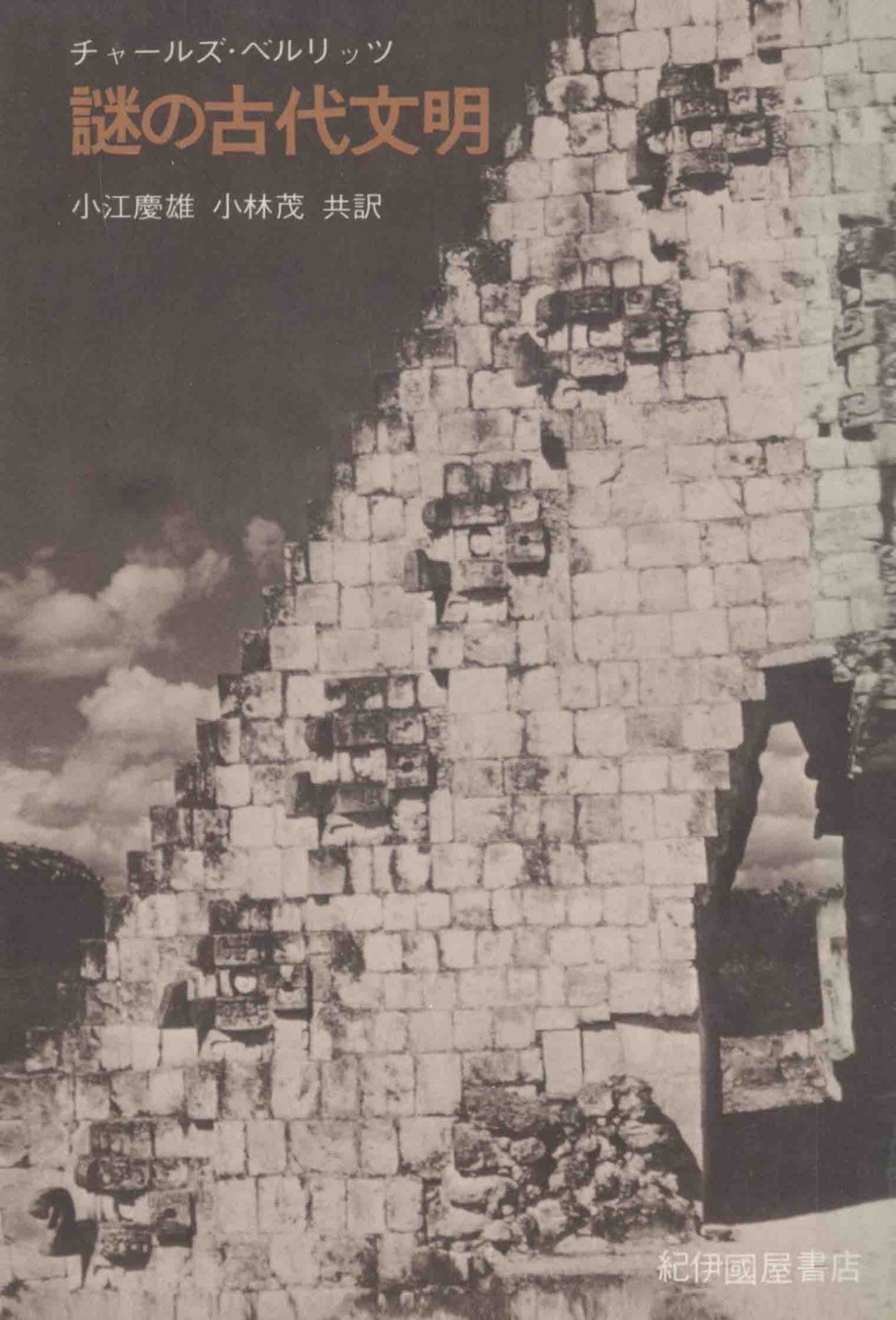


チャールズ・ベルリッツ

謎の古代文明

小江慶雄 小林茂 共訳



紀伊國屋書店

著 者

Charles Berlitz

略歴その他は本書の「訳者あとがき」参照。

訳 者

お 小 江 慶 雄

1911年，滋賀県に生れる。1936年，九州帝国大学法文学部史学科卒業。

現在：京都教育大学教授。

著書：『水中考古学研究』『海の考古学』『琵琶湖底先史土器序説』『沈黙の日本史』など。

こ ばやし しげる
小 林 茂

1931年，京都府に生れる。1955年，京都学芸大学英語英文学科卒業。

現在：立命館大学助教授。

謎 の 古 代 文 明

1974年7月31日 第1刷発行



発行所 株式会社 紀伊國屋書店
 東京都新宿区新宿3の17の7
 電話 (354) (代表) 0 1 3 1
 振替口座 東京 1 2 5 5 7 5
 出版部 東京都千代田区五番町 12番地
 電話 (263) 4 9 1 4—5 (編集)
 (261) 0 8 5 7 } (営業)
 (263) 9 0 0 6 }
 郵便番号 1 0 2

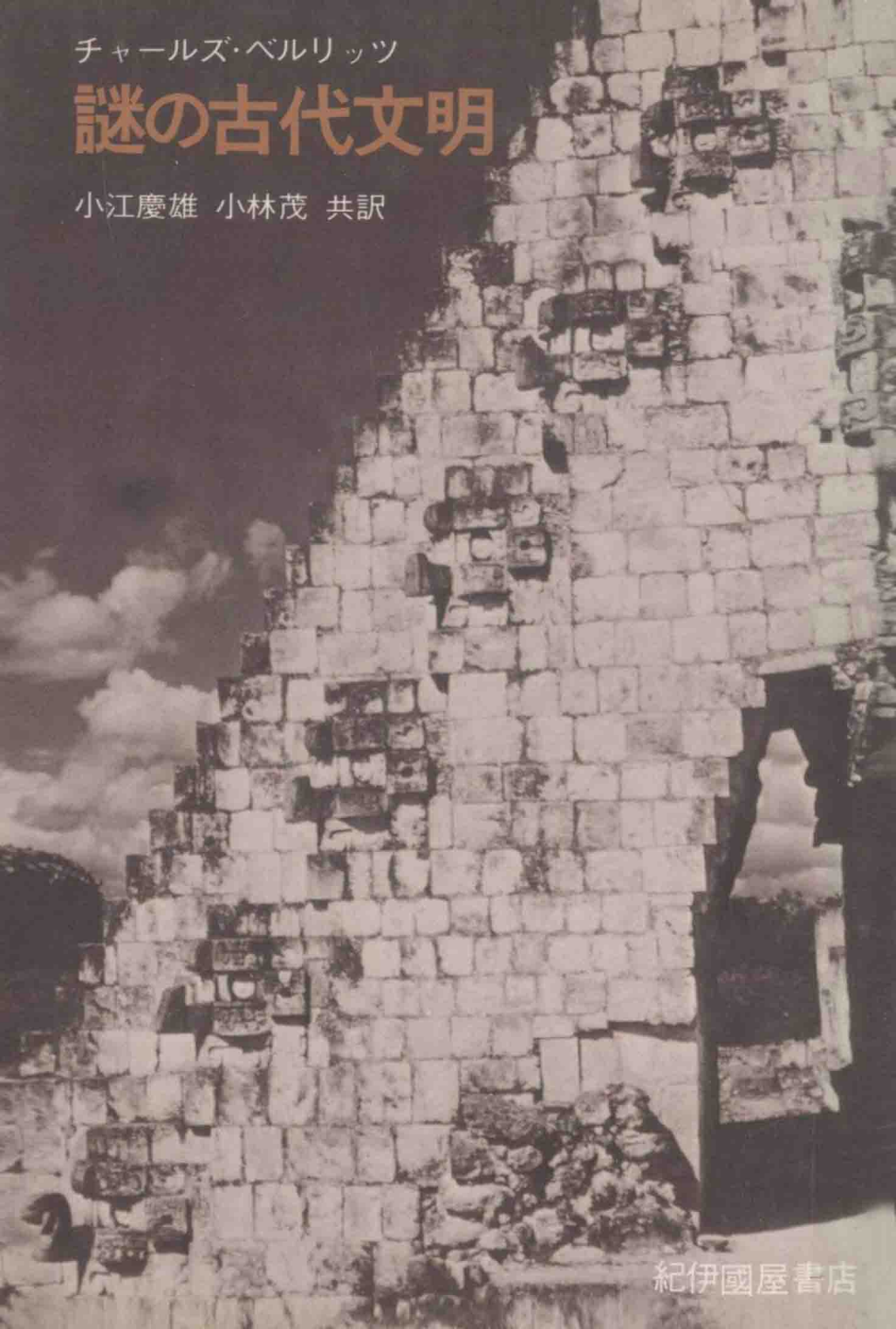
印刷 中光印刷
製本 三水舎
Made in Japan

定価は外装に表示してあります
落丁・乱丁の際はおとりかえいたします

チャールズ・ベルリッツ

謎の古代文明

小江慶雄 小林茂 共訳



紀伊國屋書店

■本書について

絶海の孤島の巨石像。数百万トンのピラミッド。先史時代の洞窟絵画の斬新さと山上・海底遺構の不思議。空からしか見えぬナスカの地上絵画。科学史上の公式発見以前に当時未知のはずの天体や大陸が古典・古地図に恐るべき精確さで顔を出す秘密。地球を半周した反対側に全く同じ太古の文字が存在した！フェニキア人やヴァイキングたちはコロンブスより遥か昔に世界の海と新大陸をすべて知っていた？シベリアの冷凍マンモスの口に残る南方植物の謎！インド古典に語られるのは古代の原子爆弾か？アマゾンの大密林には何がある？地殻や気候の大激変と人類の遠い記憶に残る大洪水の痕跡。アトランティスは確かに沈没した！本書はこれら古代文明の謎を、有名なベルリッツ言語学院創始者の孫で自身水中探検家であり三〇カ国語を解する著者が原典から読みとった古代記録や最新の考古学・人類学の成果をもとに天文・地質・言語学などあらゆる資料を駆使して解明してゆく驚異の書であり、同時に豊かな古典的教養に支えられて展開する含蓄ある文明批評は、技術文明の袋小路に悩む現代への警鐘でもある。

チャールズ・ベルリッツ

謎の古代文明

小江慶雄 訳
小林 茂

紀伊國屋書店

Charles Berlitz

Mysteries From Forgotten Worlds

Copyright © 1973 by Doubleday & Company Inc.

This book is Published in Japan by arrangement with
Doubleday & Company Inc. through Charles E. Tuttle
Co. Inc., Tokyo.

まえがき

マイアミ科学博物館名誉館長、ホノルル・ビショップ博物館研究員J・マンソン・ヴァレンティン博士の御協力に対して、深甚の謝意を呈する。

同博士は、中南米、フィジー諸島、ハワイ諸島、ニュージーランド、アイスランド、ラップランド、北アフリカ、カナリア諸島、西インド諸島、バハマ諸島のジャングル、山岳地帯、洞穴、海底その他で、失われた文化探求のための諸調査を続けてきたが、本書は、彼の探検に基づく先史考古学の積年の経験、発見資料、学説に負うところが大きい。

また本書に掲載した写真の多くは、博士が探検中に撮影したものであり、その多くは初めてここに公開されるものであることをつけ加えておく。

目次

まえがき	五
I 説明のつかない有史前の文明	九
II 過去からの謎めいた伝承	三三
III 歴史のなかで失われた知識	三三
IV 四十五階建てのタイム・カプセル	八二
V 不可能な建造物	四四
VI アメリカ大陸沖の沈没都市	二四
VII 失われた大陸と海底	一三〇
VIII 海を越えてきた神々	一六六

IX	時の壁 <small>タイム・カーテン</small> と人類の失われた時代	二〇〇
X	種族に残る太古の記憶	二〇〇
XI	激動する地球	二四三
XII	太古からの警鐘	二六五
	著者あとがき	二七七
	訳者あとがき	二八一
	参考文献	二八八
	口絵写真解説	二九四

I 説明のつかない有史前の文明

科学の発達によって、人類は今や新しい惑星を征服すべく宇宙探検に乗りだしている。それはコロムブスが、大西洋横断旅行が可能であることを実証してみせた翌年、一四九三年における西ヨーロッパの動向にどことなく似通った状況と言えよう。しかし、この高度な科学の発達そのものによって、人類はハルマゲドン〔聖書〕黙示録一六・一六、世界の終末における善と悪との最後の決戦を五分後にひかえているのかも知れない。とはいえ、時の流れか宿命か、そのどのような時点に立っているにせよ、われわれは教育や伝統、さらには概して樂觀的な歴史観のゆえに、文明は進歩するという考え方を受け入れているのである。文明は進歩して一つの均整のとれた型にはまるもの、と考えている。文明はメソポタミアとエジプトに発祥し、パレスティナ、シリア、ギリシアを経由するうちに宗教的・政治的円熟を成し遂げ、ローマ帝国において法律ないし国家体制の完成を果し、中世にはいささか衰退したものの、ふたたび文芸復興・新世界発見・産業革命を通じて急激に前進していったのだと考えている。

たしかに文明前進論は、原始時代から現在にいたるまで、ますます増大していった人間の能力と組織

化の過程を説明しているようである。しかしながら、人間がまさに自らの科学技術によって、自分自身の過去の足跡をより完璧に究明できるようになるにつれて、特にここ数年のことであるが、不安と動揺をひき起すような点が、いくつか明らかになってきたのである。偶像破壊的な疑問が、古代史研究者の面前にますます鮮明に浮び上がってきた。——人間のながい歴史には、われわれがまったく感知しない文明、そのかすかな痕跡を多少馴染みのある文化様式と混同してしまっているような文明が、存在していたのではないだろうか？

古代史に対するわれわれの概念は、もともと『聖書』への信頼によって強く影響されている。聖書関係の、特に太古の歴史を扱った文献は、もっともなことながら、ある程度偏狭な立場から書かれている。この傾向は、古代諸文化の見方を歪曲し、ヒッタイト人やミノス人などの重要な文化を、完全に無視してしまふ結果に陥った。一方、ほとんど有史前の、きわめて遠い過去に属する諸文化や、先史学として取扱うにはあまりにも時を遡りすぎて、実証資料がまったく欠けている時代の諸文明については、実に幻想的な言葉で書き記しているのである。

われわれが今ここで、本気でとり組まねばならないのは、実は、こういった歴史上見落された文化の問題とか、聖書研究者や古代史学者が無視した民族あるいは文化といった問題ではなく、現在はその痕跡しか残っていない、過去の失われた諸文化を探り出すことなのである。ほんの少し例を挙げると、南米の古代マヤ人、ブレ・インカ人、北米のマウンド・ビルダー〔ミシシッピ川流域および東南岸諸州に「インディア」、
ン・マウンド」と称する塚を築いた太古の原住種族〕、西ヨーロッパや北アフリカのおそろしく精緻な技巧をもった洞窟芸術家、前王朝エジプト人、イースター島やカナリア諸島の遺物化した住民など、はたして彼らは、独自の文化を展開したのか、それとも彼

らの文化は、ただ夜明け前の文化の遺物にすぎなかつたのだろうか？

われわれは今日、文化年代測定の手段を自由に駆使することができ、それが人類の文明に対するわれわれの時間的観念を覚醒させつつある。そのための資料は、絶え間なく世界の各地で発掘されている。

たとえば、ジェリコ〔死海の北にあるバレスティナの古都〕の周壁集落は一万年前、すなわち伝説上の大陸「アトランティス」の時代にまで遡るものと測定された。このジェリコに確立された年代は、一六五〇年にアイルランド、アーマの大司教ジエイムズ・アッシュャー〔一五八二—一六五六。宗教家。アイルランド教会の独立に努めた。〕によって定められた天地創造の年、紀元前四〇〇四年をすでに数千年上回っているのである。そもそも、この紀元前四〇〇四年という年代は、依然として、われわれが文明の歴史を考察する上に、微妙な影響力をもっている。(アッシュャー大司教と同時代のケンブリッジの副総長ジョン・ライトフット博士は、「人類は紀元前四〇〇四年一〇月二三日午前九時に神によって創造された」といっそう詳細に記している。)一八五七年になって、フィリップ・ヘンリー・ゴスが、聖書伝説を、十九世紀になって盛んに発掘された化石との関係で正当化しようとしたのは、さらに酔狂の沙汰と言うべきであろう。海洋生物の権威であるゴスは、神はアダムとイヴの創造と同時に、絶滅動物の化石を創造された、と言い出したのであった。

原子力時代に住んでいるわれわれは、地球の年齢と、人類の叙事詩が開かれる第四紀のおおよその始まりが、約二〇〇万年昔に遡ることは十分知っているが、それにもかかわらず確かに、われわれがふだん頭に描いている「文明」なるものの年齢は、奇妙なことに、人類出現に関する聖書の概念と一致してしまっているのである。所詮、われわれは文明や歴史を、ただ記録文書だけを基礎にして考えてしまっているのである。

しかし、この基礎自体が変りつつある。三万年前から測定される、旧石器時代の刃器で骨に刻んだ記号が、今や新しい角度から研究されている。つまり、この記号は月の周期の記録であり、長期にわたる月の位相現象を表わした記号であって、いわば「洞窟人」の天文学であるとされている。このように明白な記録がヨーロッパ各地の洞窟で発見されると、洞窟住居時代の人類祖先の知力に対するわれわれの概念も変えざるを得なくなる。

文字ないし文字らしいもの、今日の文字の前段階的象形記号が、フランスやスペインで発見された。このことは文字ないし記号表現が、八〇〇〇年から一万年に遡ることを示唆している。フランスのリュサックにある洞窟壁画は、一般公開されてはいないが、文明の黎明前期の男女が、おそろしく現代調の快適な衣服を着ている姿を描きだしており、われわれが普通、洞窟人から連想するような毛皮とか骨はまったく見あたらないのである。南アフリカのローデシアでは、四万七〇〇〇年前すでに銅山が掘られていたと推定されている。そして、採掘に従事していた往古の坑夫たちは、銅の使用目的を心得ていたと解釈できるのである。こうして、歴史を溯れば溯るほど、記録が残っている諸文明以前にも、今のところまだその全貌はつかめないが、文明が存在していたという徴候が目にとまるのである。

叙述された文明以前に高度な「目録に載っていない」文明が実在していたとすると、なぜその有形の記録がないのか、という嘲笑が、一部の考古学者や古代研究家の間に永年あった。また、もしこれら先史文化がきわめて進んだものであれば、どうして時計・万年筆・ライターのようなものが、ただの一つでも発見されないのだろうか、とも言われてきたのである。このような「えぐるように」辛辣な言葉に答えるかのように、ここ数年の間に、驚異的な発見がいくつかなされてきた。それは、古代人による電

気の知識と利用、惑星の距離・重量・体積、地球の具体的概念（たとえば、南極大陸の公式「発見」より数千年前、すでにこの大陸に関してある程度の知識があったことなど）、地図製作法や球面幾何学に関する高度な知識、顕微鏡レンズの研磨、計算器具の使用や、従来まさかと思われていた科学的でないし数学的知識を示唆するものなどであった。

あたかもそれらは、この地上に居住した先住民族が、鐘となるような記念碑や建造物の形でわれわれのために伝言を残し、それを解読し得る、のちの進んだ民族にとってモデルとなり、また警鐘として役立つよう意図したもののように思われる。

これらの記念碑には現存しているものもある。また、従来人間がつくったものとしては大規模すぎると考えられて、「自然の」地形的特徴と見分けがつかなかったものが、実際はわれわれの度肝を抜くような記念碑である、ということにもなりかねないのである。エジプトの「大ピラミッド」はその顕著な例である。このピラミッドは、測量調査を重ねれば重ねるほど、従来われわれが想像していたものとは微妙な点でくい違うことがわかり、われわれの考え方も変わってくるのである。これは単なる墳墓だったのだろうか——ギリシアのさすらいの歴史家ヘロドトス（前四八四〜前四二四年）が考えたように。あるいは、天文学者や地図製作者のために基準子午線を示すものだったのが、やがてその建造意図を忘れられてしまったのだろうか。ナイル川流域の何百万におよぶ農夫たちに、種蒔きや収穫の時を示す巨大な日時計だったのだろうか。それとも、巨大なタイム・カプセルであったのだろうか。つまり西暦紀元はるか以前に、古代民族がすでに、地球の重量、地球・太陽間の距離を知っていたことを示しているのだろうか。ピラミッド自体が数学や恒星年を解く鍵であり、地理学や地図製作の手引きであり、そして従来予想もされ

ていなかった太古の度量基準体系の貯蔵庫だったのであろうか。

大ピラミッドは、今もわれわれの眼前にある古代の表徴である。それは形としては見きわめやすいが（四十五階の高さなのだから当然である）、その本性となるとわかりにくい。実際、世界各地には、正体不明の記念碑が他にもある。あるものは、エクアドルのキトーの町外れにあって、永年人造ではなく自然の山と考えられていたパネシリヨ山のように、あまりにも巨大なために正体がかめなかつたのである。メキシコ、ペルー、ブラジル、ヨーロッパ、中央アジア、さらには太平洋諸島にさえ、一見自然の地形と見えるものは数多くある。

考古学者が今日自由に駆使している方法や機器は、過去の勸や労力にたよる発掘とは比較にならないほど進んでいる。その新しい機器としては次のようなものがある。俯瞰ふかん予察のための飛行機と航空写真術、水中探査のための小型潜水艇、水中探知機およびスキューバ（フランク）装備の潜水術、底土（表土と基岩との中間に位置する土）調査のためのセシウム磁気計、電波探知機、鉱物探知機などがある。古代言語の比較言語学的研究は、暗号解読方式に基づいて確立された分野に属する。そして、古代遺物については、復元・整理・様式設定をし、放射性炭素14測定法（一九四九年、ウィラード・F・リビー教授（当時シカゴ大学）らによって発表された方法で、有機物質中の炭素の放射性同位元素C14の含有量によって、遺物の古さを知らうとする方法）をはじめとして年代測定をおこなう、まったく新しい科学がある。

奇妙なことに、現代考古学調査の技術的進歩は、現代の軍事技術に負うところがきわめて多いのである。遺跡の多くの空中観測が、第一次および第二次世界大戦中に作戦行動中のパイロットによってなされ、以後調査が推進されたのである。飛行機による上空からの地形探査によって、たとえばレバノンのティールその他古代地中海のフェニキアの都市の、今は海中に没している港が確認されているのである。

ポー川デルタ地帯の水の都エトルリアの道路や運河も発見された。この失われた古都は、ヴェニス近郊スピナで、数世紀にわたって沼に埋もれていたのである。ローマ時代のいわばラス・ヴェガスとも言うべきバイアエという沈没した保養地や、中央アメリカのジャングルに覆われた多数のマヤの都市、南米プレ・インカの廃墟などが再発見されたのも、飛行機のおかげであった。空中からの新しい遺跡の予察について一つの実例を挙げて示すと、次のようである。イランのペルセポリス付近で、四〇〇にのぼる予想もされていなかった古代遺跡が一三時間の飛行観測中に記録され、しかも、その近くの地域を撮った立体航空写真が、上空からしか目に入らない地形のなかに、ある考古学調査団が一年半以上もかかって踏査して、その地図を作ろうとしていた都市の輪郭を、くっきり写し出していたのである（多くの場合、
構造物の存在を識別できるからである）。

戦争の道具はこうして、古代遺跡の位置をつきとめ、研究をすすめる条件を、測り知れないほど優位に進めてきたのであるが、その古代遺跡の多くは、戦争のために征服され滅亡したのであった。と言うことはまさに、有史時代にも見られる進歩・戦争・破壊・覚醒という循環についての、きわめて説得力のある評言と言うべきであろう。

地表、底土、海・湖・川の底、大洋にかくれた陸棚、または深海を調べてみると、われわれのまったく知らないような人間の生活にかかわる証跡のみならず、「未知の」文化の証跡がつきつき明らかになってくる。しかしこれらの文化が減じた理由は、いまだにわかっていない。事実、これら太古のものとと思われる文化の遺物を究明していくと、かえってその謎はいっそう深まるのである。ペルー沿岸の広漠たる砂漠に、数百平方マイルにわたって、上空からしか判別できない宇宙地図のようなひろがりや、図